

7時40分。釧路発の列車でアカシヤの町札幌へ。夜の食事は、ちらしずし（カニ・し
ようが・卵・しいたけ）。

夜行の疲れもみせず、朝6時30分札幌に着く。すぐ様バスに乗車し朝食をとりに豪華
なサンドイッチ・牛乳・スイカに満足し、ホテルの前の時計台を見る。

「この道は、いつか来た道

あゝ そうだよ ほら 白い時計台だよ」

この日も朝から小雨。よくよく雨に見込まれたらしい。

北大の構内に入り、その規模の大きさにびつくりする。一面の緑の芝生、がつしりとし
た大木にかこまれた北大の学生に羨望を感じずにはおれなかつた。ポプラ並木も、雨と、
大勢の人の為、ロマンテイクにこそなれなかつたが、やはり印象に残る思い出の一つであ
る。

バスは札幌の町を走り、雪印乳業の見学。本当は途中通過した札幌ビール工場の見学を
望んでいたのだが、そこは素通り。残念／ アカシヤ並木をバスで通り羊ヶ丘展望台へ。

晴れた日には、羊が群をなして、草をはんでいる姿が見られる羊ヶ丘であるが、この日
は朝からの雨の為一頭の羊もそのやさしい姿を見せておらず、ただ青々とした草のみが一
行を迎えてくれた。仕方なく牧草だけを背景に記念撮影する。

札幌より京都へ

短食二の二 西 居 一 枝

北の都札幌市内を見学して、又私達一行は登別温泉へと向かった。途中、全く北海道な
らではと思われる大工業あり、大牧場あり。この世は「天国じや」と云いたげな牛、馬の
間を真直ぐに走る国道をつつばしる。しかし私達はこの雄大な景色も7日目ともなると少
少あいてきて、一同コツクリコツクリとやり始める。遂には二号車、先生を初めとして全
滅、目をあいてきばつているものはほんの数人となり、人の眠顔を見わたして見わたして
喜んでいる。

バスが少し小高い所へ来て止つたので、一同おどろいてバスをおりるとすごい広い所で
羊ヶ丘と云い、普通天氣の良い時は羊がいるとか、残念ながら誰がお精進が悪いのか、こ
こ2,3日曇っている。しかしこれ又すばらしくずつと果ての方まで見わたせ、視界をさま
たげる物等一つもない。全く北海道である。

又北海道のアイヌ部落白老コタンにも行く。ここは、純粹のアイヌ人が少なくなつたと

云われる内で、純粹のアイヌ人だと云われる。ここで、アイヌの踊り、アイヌの宝物、工芸品等を見せてもらう。この首長さんは真白なワイシャツを着て、折目正しいズボンをはいている。写真をとるとなると、その上からアイヌの着物を着、帽子をかぶる。まさしくインスタント。その首長さん又話術を心得ていて、アイヌ語、日本語、珍英語が飛び出す。私達もすっかりアイヌづいて、ピリカピリカサンドシリピリカ、インナクルピリカ、ヌウンケクスネと歌い出し、ペンダンと指輪を買つてとくいがつている。

そして一日中バスにゆられて、遂に着いた先が東洋一の温泉旅館、これ又、混浴で有名ときている。先生として頭の痛い所。この登別温泉の湧き出ている地獄とやらを見に行く。さすが名の如く、すごいもの。歩いている足元から湯気が出てくる。危険区域では、ポツポツと坊主が吹き、もうもうと煙をはいている。闍魔さんの気焰もさながらこんなものであろう。その夜、この大浴場のある第一滝本旅館で一泊。さすが湯の町、ゆかた姿で夜おそくまでぞろぞろ歩いている人が多い。私達一行も少々うかれてくる。この旅館はすごく大きくて、何度も迷子になってしまう。上級生はダンスホールでさつそうと踊っているが、二回生はアイヌの熊祭りを見に行つたり、上級生のダンスを指をくわえて見ていたり。ここで、出発以来初めてのマツトレスに大よろこびで、貧乏性は眠れないとか云つていても一晩中運動する人がいて両サイドは被害甚大である。

明るく日の11日目、眠心地よくて、なかなか起きられない。この日も又1日中バスにゆられて洞爺湖へ。一夜にして出来た昭和新山を征服する。頂上からの眺めは又格別、洞爺湖を見おろして、意気たんとたんとなつたがいが、下りが大変、靴を脱ぎ出す人も出る始末。男性にとっては写真のとり所である。

先きほど見おろした洞爺湖を遊覧船で一廻り、上で眺めたのとは全く異り美しい。昭和新山、明治新山と相並ぶ山々を眺め、鶴亀の島や大山の島の間を通りぬける。このすばらしい風景をカメラにおさめないものはない。船から上つてからポート・モータポート等が半額との事、しかし8月とは云え、ここはさすが北海道で寒いのと、1日中バスでゆられて疲れているので、乗つた人は無かつた模様。大半は指定のみやげもの屋へ殺到した。指定の所では2割引きとか、しかし2割引いてもらつても、今までの所より高いので買ものをやめた人も多くあつた。又、みやげものを早い目に引き上げた私達よりも前に帰つていて、温泉につかつて上気嚙になつている人もいた。この旅館は山の上ホテルとは云うがアパートのような建物で、その窓々には、万国々旗がたなびく。男性でなくとも見ている楽しい。3段よりパンティが舞い落ちてくる。さすが女子ばかりの旅行団体である。

このホテルは少し小高い所にあつて、洞爺湖をはさんで美しくそびえる蝦夷富士、羊蹄山が一眺。この山も今までの湖や山のように、ロマンチックな伝説がまつわるのであろう。湖、山とできながら漢詩にでも出てきそう。

北海道上陸後八日間の旅を終えて、今日内地に帰る事となる。最後に函館市内遊覧。石川琢木の座像、トラピスト修道院等を見てまわる。景色はいいのだが、いかの干した臭がはなはだしく町全体が臭い。それにこぶの干した臭いが混ぜ合さりなんともいえない函館香水となる。市内遊覧最後に函館山にバスにて登る。少し曇つてはいるが、眺めはすばらしい。左に函館湾、右に何とか湾その間に大小の家がつまっている。そして函館港には大きな船があり、ちょうど青函連絡船が出港する所ですごいのだかな感じがする。これが夜ともなり家々に燈がともり、港のネオンサインがつくと世界三大夜景の名に恥じない眺めであらう。

函館山を最後に青函連絡船に乗り込む。約一時間近く遅れている上に、定員より250名ほどオーバー、それに加えて私達団体は地下3段の船底、私が寝ている板をへだてた横には、にしが泳いでいるだろう。しかし何しろ船底のため暑い事この上なし。いよいよ出港ともなれば皆甲板に出てテーブルをにぎっている。ソ連へ行くために同じ船に乗っている人がいて、その人の見送りが、又労働歌を歌い大変なもの。我々も負けじとばかりに大声を上げるが、我々の見送りは悲しいかな郡先生のお弟子さんと旅館のおにいちゃん等三人。とてもかなわない。

やがて出発、私達の楽しかった事、面白かった事を残して北海道を離れる。夕もやにぼんやりとかすむ海岸線を感じ無量でながめる。私達を心から楽しませてくれた北海道へ又来られるか、もう二度と来られないかわからない。何だか外国から離れるような感じがする。その内北海道とも別れ、青森到着に近くなると、出口はものすごい人の波、頭のカチカチのおじいちゃんやワンワンとわめく赤ン坊等で大混雑、元気発らつとして汽車の席を番取るために足に自信のあるものは自分の荷物は荷物持ち組にまかせて、ハンドバック数コを持って陣取っている。スワ／ 着陸となると、押し合いへし合いで、やつとの思いで外に出ると走つた走つた、大学入つて以来こんなに走つた事がないと思われるくらい走つた。しかし、どのホームへ走つていいのかわからずうろろうしているもの、どこでもいいからつっぱしる者、違う汽車に乗ってしまう者やなんやでてんやわんや、全くの引き揚げである。私達一同交通交社のはからいで、席がとれ、その夜は皆早く眠りに入つた。しかし早いと云つても23時10分の汽車が遅れて12時前、それからひといき手柄話でもちきり。

朝方目をさますと今までと違つた感じの景色、ああ帰つて来たなあと思う。本当に東京まで帰つて来ると、京都へ帰つてしまつたような気になる。旅館へ行くなり屋間からお風呂へ入り、今までの旅のあかをすつかり落とすと、今までどこに入つていたかと思うような服を着て、サツソウと次から次へと出て行く。面会人がぞくぞくあらわれる、電話がジャンジャンかかってくる。私達のグループのように何にもないものは、玄関でフアツションショウを見、付近の氷屋へ行つて又お風呂へ入つてそれ以上する事なし。しかたがないから銀座へでも行こうと云う事になり出たのはいいが、歩けども歩けども電車通りに出ない。フト頭を上げたところが出た旅館、しかたがないので寝る事にした。

東京で一行が半数に減り、一路京都へ向かい、13日間の大旅行を終え、おみやげがいっぱいで両手に持てないくらい。中でもすばらしかつたのは太田先生だつた。

| |
|----------------------|
| 第 12 号 別 冊 |
| 原 稿 募 集 |
| 締切日 昭和 37 年 5 月 20 日 |